会議録（要点筆記）

会　　議　　名	令和２年度第２回米原市総合教育会議
開　催　日　時	令和２年９月30日（水）　午後３時30分から午後５時
開　催　場　所	米原市民交流プラザ（ルッチプラザ）２階研修室
出席者および欠席者	【出席者】 （構成員） 平尾道雄市長、山本太一教育長、中川清和教育長職務代理者、法戸繁利委員、膽吹照子委員、本庄通子委員、井口英知委員（６名） （事務局） 鹿取輝之政策推進部長、西村善成政策推進部次長、松村英香政策推進課課長補佐、上村浩教育部長、口分田剛教育部次長、花部正人教育総務課主席参事、金澤博文学校教育課長、桂田峰男歴史文化財保護課長、藤田明子学校給食課長、梶田悟生涯学習課長、高畑徹こども未来部長、小寺真司保育幼稚園課長ほか担当職員２人（14人）、民間事業者（教育振興計画策定支援）１人、傍聴者１人
議　　題	（１）米原市の教育政策の基本的な考え方について（教育大綱の位置付け、考え方）
結　　論	○教育大綱の位置付け、教育振興計画との関係については、前回と同様に教育振興計画をもって大綱に代えることとし、引き続き米原市の教育政策の基本的な考え方について議論していく。
審　議　経　過 平尾道雄市長	**１　開会** （事務局から開会あいさつ） **２　市長あいさつ** 皆さん、こんにちは。市長の平尾でございます。 本日は、教育委員の皆様におかれましては、お忙しいところ、米原市総合教育会議に御出席をいただき、誠にありがとうございます。 また、皆様には日頃から米原市の教育行政の推進に多大なるご尽力を賜っておりますことに対しまして、重ねて感謝を申し上げます。 さて、本日は、第２回目の総合教育会議となります。 前回、４月 21 日の第１回目の会議は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、臨時休業時の対応について、委員の皆様方から貴重なご意見を賜りました。 現在、新型コロナウイルス感染症の拡大は、個人的な見解ではありますが、一定落ち着いている状況ではありますが、教育現場では、夏休みの短縮や運動会の短縮開催、修学旅行の行き先の変更など、これまでとは違う方法で対応していただいております。現場の先生方には、子どもたちが安心して学校生活が送れるよう、細心の注意をはらいながら、日々子どもと向き合っていただいてご奮闘いただいており、大変ありがたいと感じているところです。

	本日の総合教育会議では、現在、第２期米原市教育振興基本計画に位置付けられている教育大綱につきまして、第２期基本計画の見直しに伴い、教育大綱の位置付けをどうするのかについて、あるいは、今後の米原市の教育政策の基本的な考え方について、御協議いただきたいと存じます。 皆様からは、米原教育の基本のところをどう取り組むのか、どう備えていくのか、忌憚のない御意見を賜りますことをよろしくお願い申し上げ、甚だ簡単ではございますが、開会に当たっての挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。 **３　協議事項** （１）米原市の教育政策の基本的な考え方について（教育大綱の位置付け、考え方） 《事務局から内容説明》
平尾道雄市長	教育大綱と教育振興計画に基づいて現場を進めているところです。目標に対する現状の報告もありました。皆さま方からの質問、御意見をお願いいたします。
山本太一教育長	前回、平成 29 年３月に策定されたときは、２年前の平成 27 年度から協議を始めていました。今、第２期目の３年目になる。当時、教育大綱と教育振興基本計画を一体的に策定しようということでやらせていただいて、イメージとしては持ちやすかった。 こういった教育理念の下にやっていこうというのが一体的に示すことができ、これを念頭に置きながら、子どもから高齢者に至るまで、いかに米原市が学び合いのまちとして動いているかという視点を全体で見てきた。当然、教育は学校教育に目が行くが、広く生涯学習の視点を踏まえて、お互いが高齢者であっても、いろんな場所で集って、それぞれの立場で学び合いをしているというものを期待しながらイメージしていた。学校はもちろん、公民館の生涯学習講座では、たくさんの方が多く集っていただいたし、スポーツの世界でも、集っていただいて、ボランティアの立場でも参加いただくことで、何か学んでいただいたり、励みになったりそういった形で、米原市をうまく動かしていただいているのかなと感想として思っています。ちょうど今、「ともに学び、ともに育つ、学び合いのまち米原」の学び合いというのは、ちょうど平成 28 年頃に学校の教育の中で主体的で、対話的な深い学びを展開しようとする新しい学習指導要綱が出てきた時で、マッチングしていた。サブテーマの「自分も人も大切にし」という部分も、ちょうど全国的にいじめの問題が厳しくなってきた中で、人権の視点でいじめ防止を含めて、自尊感情を高め、周りへの温かい気持ちを待つことを大切にするなど、マッチングして良かった。 当然、米原らしさを考えたときに、地域を誇る、ふるさと米原に愛着を感じる

平尾道雄市長	子どもを育てたいという想いは、誰もが願っているところです。地方創生で地域の活性化も含めて、米原ここにありということ、子どもたちに地域教材を活かした学びを進めるということは、学校教育の中でこれからの世代を担う子どもたちの教育には非常に大事かと。事務局を預かる担当としては、ありがたかったし、大綱を指針にしてきた。そういう立場でやってきたので、教育委員さんのそれぞれのお立場で御意見をいただけると思いまして、お話させていただきます。 当時は、本庄さんもおられたし、稲村先生、河居さん小路さんもおられた。驚いたのは、結構、大綱について教育委員さんが活発にお話しいただいたこと。特に大綱の中のサブになっている「自分も人も大切に」とか「地域を誇る人づくり」は御議論いただいた。私も負けずに議論に参加した覚えがあります。本当に米原市の市民が、市民感覚で子どもたちにどういうアクションを起こしてほしいとか、学びの中でどういう大人になってほしいかという願いを込めて議論をしていただいたように思う。 行政としてコロナ禍に緊張感を持っている。いろんな変化が起きている。許していい変化も、これはあかんという変化もある。学校でも場面によっては、集団で集って行うのが教育の基本と考えていましたが、オンライン授業のように教育の有り様や子どもたちの対応もどんどん変わってきている。決して不登校が批判や攻めの対象ではなくて、子どもたちの教育の受け方の一つになっている、そういう多様性を寛容になって教育の在り方として認められることになっていくことも、ある意味うなずかなければいけない。 もっといえば、地域でいえば、家庭の環境も10年、５年単位で変わり続けています。米原市内でも高齢者独居が４割近くになろうとしているような現実もあるし、３世代同居でおじいちゃん、おばあちゃんと暮らすことがレアケースになってしまっている。家庭も変わっているし、地域も、かつてのような状況ではなくなった。コロナの影響もあり、地域の行事も中止、縮小になっている。コロナが収まってもこの先どうなるのだろうという状況、従来とかなり違う様子も伺えるし、家庭や地域、学校が従来の形ではなくなる中で、どういう大綱を持って、教育振興のための細かな方向付けを作っていくのか、作れるかどうかということになる。今まではこういうように作ってきたが、新しい観点や情報収集して改めるところもあると思う。
委員	教育大綱は多分に理念的なところがありますので、大きな基本的なところは変わらないと思いますが、時代背景をどう考えるかということが大切だと思う。 コロナ禍の中で、私の日常の経験でいうと、子どもと接する機会がよくある中で学校の行事が中止されたり縮小されている現状もある。その中でコロナ禍をかなり深刻に捕らえないといけないと思ったのは、例えば、小学校２年、３年生ぐらいの子どもは、今の季節になると虫かごを持って、バッタやカナヘビをとって

委員	しまう。チャイムがなったら徒党を組んで。学校の虫たちを全部取っているような状況。そういうことは発達の段階で、一過性のもので２年生、３年生のときだけ。だがそれもできていない。禁止になっている。ドッチボールもできない。ということは、動物としての本能的なものも制約されている深刻な状況だと思う。根源的な影響があるのではないかと思う。 　私の地域では、これまでの賛否両論の議論を踏まえて実施してき字の行事がほとんど中止になった。いままで賛否両論、紆余曲折があって、つながってきたのですが、これがコロナという理由だけで中止になる。これが、ちょっと聞くと、楽だと感じられるようになってしまった。同意もないし、説明も要らないし。ただし、今度は逆に再構築するときにはものすごく大きなエネルギーが必要になると思う。これを機会に見直すことが必要だと思う。去年の計画を出して日付を変えて出すようなことではなく。ぜんぜんステージが違うと個人的に思うことがある。 　「今年はいいな。」と地区の役員さんに冗談で、口が滑ってしまうこともあるが、このつけがいずれ回ってくることは考えないといけない。自分も協力しなければならないと思うが、若い人が参加することを断るのは、次につながらない。１年、２年で元に戻すようにしないと勝手なことを言い出すと心配するところ。 　教育でデジタル的なことを使ったり、伊吹山テレビでやっていただいたりしているし、YOUTUBE でも行っている説明もわかりやすい。会社なんかでも公認会計士が動画で説明してくれる状況もあって分かりやすい。今までは、集まって同じようにやってきたが、子どもたちの能力によって吸収できる力の差が出てくるだろうと思う。それが、得られる状況を低学年のうちに育てていかないといけない。スマホ１台あれば百科辞典があるのと同じような時代。小さいときに使いこなす力がないと差がどんどん大きくなる。考え方や理念をしっかり持たないと、知識だけで頭でっかちになってしまう。いいように使われないこともある。低学年のうちに使い方を学び、自分で学べる状況をつくっておく必要がある。ハード面は国が前倒ししているので、１人１台はあるが、使い方がわからなかったり、よく触らないといわれる先生もあるかもしれない。先生方のフォローも重点的にしながら、子どもたちに教える体制を作っていかないといけないと思う。 　もう１つは、個人として補導員もしているが、ひきこもり対策。これが非常に多いという話は出るが、誰だということは出てきにくい状況にある。わからないからほっといていいのか、探し出すのか、難しい状況だが。単純に思うのは日本の労働者は外国人労働者も含めて成り立っているが、ひきこもりの人たちが働けるようになれば外国人も減るし、家庭も経済も回っていくことになる。ひきこもりは卒業がなくて、年々対象年齢も上がっているのが現状。どこかで手を加えていかないと。若い人もいるのに能力が生かせていない。何か手を打っていかない

	と。せっかく日本人として生まれて、社会参加してもらって。とくに地域の人との関わりから始めてもらえれば、何かできるのではないかと。
平尾道雄市長	時代が変化していることは皆さん受け止めらえていると思いますし、教育というのは基本的なところを押さえておかなければ積み上がっていかない。人間を支えるという観点からいうと根っこの生えたものを持っていなければならないし、その意味で大綱を作っていかなければならない。時代とどう向き合うかを含めてコロナ禍で教育をどう位置付けたらいいか御意見をいただきたい。
委員	４月から委員にならせていただいて、学校の現場とか保護者の気持ちとかを考えながら見てきました。コロナもあって、今もあったように時代も変わり、デジタルも進んで。でも大事なのは人との関わりであって、人の気持ちがわかって共感できる。時代が変わっても変わらずに保ち続けなければならないものもあるのに、コロナに流されているところもある。マスクをしていて表情がわからない、人との距離を置いてしまうという難しい時代であるけれども、教育という人を育むものとしては、知恵を絞っていかなければならないと思う。 地域の関わりについても、地域ごとの行事も今年はやめようという動きがあって。人によっては、畑と家を往復するばかりだということも聞く。これにより孤立になりやすいという問題もあって、関わりというものがなくなる、密になってはいけないけれども密が必要になるということもある。
委員	平成 29 年 10 月に教育委員になって、初めてでドキドキしながら教育大綱を読ませていただいた記憶がある。その時に教育長がおっしゃっていたと思うが、子どもたちが地域を誇れる人づくりという中で、子どもたちが卒業して就職して、大人になったときに、大学など遠くに行って、それでも地域を誇れる、自分の地域はこんな地域だと誇れる子どもに育ってくれたら、また、米原市を思って帰ってくるとか、先祖を思う、米原市を守っていくことにつながる。 お話ボランティアの立場で言うと、コロナ禍になって、人間性とか人間力、人との関わりが遮断された中で、我慢、ひきこもり、うつとか、このような人が何人ぐらいいて、子どもたち、高齢者、障がい者、月に２回、ファミリーサポーター、それぞれの方をみていると、声を上げられない方がたくさんいることに気づいた。法律相談や結婚相談とか、そういう場に来てくれる人はいい。行けるから。思っていても出て行けない人がいる。障がいのある方の親の方に聞くと、外に出ていくこともできない。Ａ型支援の方はお仕事されているが、生活介護の方は昼から４時まで缶詰め状態。気を晴らす場所がなくて。それでいて職員は人手不足で、その場に抑えることしかできない。そんな中でちょっとでも癒される場になるようにということでお話ボランティアに行っている。声を上げて相談に行けない、大変な状況があっても、そのことをを言えない人が増えている。家にインターネットがあって、畑野先生がやっておられたと思うが、インターネットを

	通じて声を出すことも、声を掛けるシステムというがあってもいいのではないか。 　インターネットで顔を突き合わせて相談する、１対１でなら話してくれる人もいるのでそういうシステムができるとよい。私個人、コロナになって、暇になったのに声を掛けることができなくなってしまった。久しく連絡していないこともあって。これではだめだと思って、意識して声をかけるようにしている。教師も家庭訪問をしていると思うが、目に見えて困っているかわからない人にどうかかわって対応していくのか。インターネットで１対１でお話ができるようになると、いいかなと。一番困っている人にも光が当たるのではないか。学び合いもそういう人も含めて考えないといけないし。その部分を強調した米原市のシステムというか。市役所の職員も外に出ていくような仕組みがあれば。
委員	基本理念を読み返していて、今、何が一番必要か、何が大切かと感じていて、やはり、生きる力、生き抜く力が大切だと感じている。異常な災害があり、コロナがあり、スピードのある社会の変化。そういうものに立ち向かえるたくましい力が必要な気がする。土台が何になればいいのかわからないが、生きる力が下になるのか、それとも学校での学び・基礎基本があって生きる力があるのか、生きる力があった上に学習を習得する力があるのか。そこはわからないが。
平尾道雄市長	お話を聞いていて、皆さんのお話の冠には教育がついているが、教育だけを議論したりする状況ではないとあらためて思った。あらゆる人の生き方、人生をどう支えるか、地域の有り様、行政システムの変化も含めて。学校現場や保護者、家庭、生涯学習、家庭教育とか、そういう教育という言葉がつくだけでなんとなく成り立っていたけれども、それも大事だけども、もっと全体として、明確にはこれと言い切れないが、考えていくことが必要。 　行政の中では、地域共生社会という言葉を使い始めている。お互いに支えあって社会をつくろう、時代をつくろうとしていて、そういうことに役立つ職員を、そういう向き合い方をしないといけない。私は教育の担当、総務の担当、福祉の担当ということで終わっていた時代ではない。一人の方がいたら、その家庭には貧困、病気の問題もあるかも分からないし、介護も、ひょっとしたら人間としての育ちの問題もあるかもしれない。不登校であったり、ひきこもりであったり、ということもある。一つ一つをつまんでみてもどうにもならないことが明確になってきている。教育大綱や振興計画は、やはり米原市がどういう人間を育てようとしているのかということ、教育だけでなく、もっと広いステージで拾っていこうということが大事だと思う。今日の議題は、まずは、教育大綱の定め方についてとなっているので、もう一度事務局から補足説明を。 《事務局から説明》 　今回も第３次教育振興計画の中に教育大綱を定めることとしていく、教育振興

	計画の中から基本方針も目標も全体のイメージも作っていくことでよろしいか。
山本太一教育長	私も前回から継続してやらせていただいているので。教育理念的な方向性として教育大綱を持ちながら、具体的な施策としての基本目標を作っていく。今、時代は流れており、コロナ禍の中で、私たちが感じたことを基本目標、施策などに落とし込んでいくということかと。地域共生社会とか時代背景をいろいろ語っていただいたが、米原市の理念を掲げて新しい時代背景の中で基本目標を定め、具体的な政策を実施していくことがありがたい。
平尾道雄市長	教育大綱と教育進行計画を一本化した形で進めていくことでよろしいですかね。そういう方向で御理解をよろしくお願いいたします。 今となってはという話ではあるが、学校は休業となり、学校をある意味放棄してしまったと考えている。家庭や地域に置いてしまった。これからも学校が集団で集まれない場面も考えられると思う。学校と家庭、子どもたちがオンラインでどうつながるか、喫緊の課題だと思っている。学校という集団で学ぶ、集団で体験をするということだけではない、メディアなどから個別の情報を自らが取って学びにしていく、経験にしていくこともできる時代ですし、それを正しく評価していかなければならない。 本日、議会があり、GIGA スクールのタブレットの予算が通った。学校と子どもたちがつながるツールを常にもっている環境をつくっていく。コロナは感染症の問題ではあるが、行政感覚では大きな災害が起きていると考えている。その意味では子どもたちは被災者であり、どう復興していくのかを考えている。そういう観点を含めて、再び同じような災害があったときに、どのように向き合っていくのか、その強さは行政の課題だと思っている。今一度、皆様から地域の状況や不安、解決方法について御意見をいただきたい。
委員	教育の関係で、今まで〇〇学校、〇〇先生ということが当たり前だが、変わっていくのではないか。先生にも得意不得意がある。例えば全部の学校の時間割を同じにすれば、得意な人が算数を教えて、他の人はフォローする、そういうやり方もあり得る。そうすることで、もっと「人づくり」へ力を注ぐこともできるのではないか。米原市は CATV が普及しているのであれば、上手に使うことも有り得るのではないか。また、最近は高齢者のスマホ活用も進んでいる。コロナ禍で集まりたい人もいる中で、スマホ上では複数で話せる状況もある。新しい結びつきをそういうものを利用して作れるのではないか。芸能人も YOUTUBE でプロダクションに所属しないケースもある。若い方はご存じないかもしれないが、西川きよしの「西川に布団の社長というな」というネタは、布団の西川が吉本に頼んで生まれた。普通、広告宣伝費を払うところだが、YOUTUBU では無料で宣伝してもらうこともあり得る。売れている人は無理だが。今までの感覚では考えられない広がり方。組織として交渉力があったものが、今は個人になっている。学校の世

	界もそうなっていくのかなと。ひょっとしたら学校の先生が YOUTUBU をやって、効果があればアクセス数が増えて、高い報酬を得ていく。そんな人が出ることもあり得るのではないか。効率的に最新のツールも使っていって、最終的には地域社会が良くなるような方向でそういうものを使っていくようにしなければならない。IT に長けている人材を登用して中長期的に対応が必要。ハードの入れ替わりは早い。この機会は思い切って進めるいいチャンスでもあると思う。弊害もあるが思い切って進めることがいいと思う。
委員	子どもにスマホを触るか聞いているとゲームや YOUTUBE に使っていると。子どもたちは、操作はよく知っている。コロナがなくても方向性としては、間違いなく子どものスマホが当たり前の時代、そういう方向になる。子どもにわからないことがあったらスマホで調べたらというと、「どうやって調べるの。」と返ってきた。IT 化は進んでいるが、使いこなせなければ、ただのゲーム機になってしまう。こういう時代になればなるほど、教育に必要なのは基礎基本だと思う。取捨選択する力、検索するワードを考えて検索する、必要な情報を選ぶ力。新しいことをやることは重要だが、当たり前の原点に戻って、枝葉を取って、本当の基本をしっかりしないと、時代に合った適応力を育てないと振り回されてしまう。教師も同様で、根本を抑えておかないと文部科学省の通知に振り回されて、何をしているのかわからなくなってしまう。言葉にして、文章にして共通理解して、基本的なところを教えていかなければならない。
平尾道雄市長	農政なんかでも、国はコロコロと変えている。それを行政が追いかけてきたが、本当にコロナを受けて、思ったのは、感染症の現場は暮らしの中であり、自治体が抱えている。開業医と総合病院、家庭と暮らし方が感染症予防の基本。教育の在り方として、本当に基本を押さえ、基礎基本をやると。６年間で根っこのある生きる力、生き抜く力のある子ども育てることになる。それぞれ一人ひとりが自律型で生きていけるようなシステムや教育。だけどもハンディがある子どもや家族がいるのでそこはしっかりと支えるシステムを作りながら。教育は教育だけでなりたたない。地域社会が共生して支えあう、多様であることを認める、許していく、寛容である。こういうことを含めて、教育大綱や教育進行計画は米原で育った子どもが立派な大人に育つ原点、基礎をやっている。コロナであるからこそ、原点の根を押さえていきたい。
山本太一教育長	農政も文部科学省も同じ。ここ数年、コミュニティスクール、英語教育、GIGA スクール。コロナの中で学校の機能として考えないといけないと思うのは、教師は教えるのが本旨だが、３か月の休校期間があって思ったのは、子どもたちが自ら学ぼうとする力を培ってきたかというと反省点が多い。教えることが丁寧になり、先生が話しすぎたりしていないか。先生は宿題をドンと出して、〇付けに追われている、子どもも宿題に追われている。これからの GIGA スクール構想で、

	子どもたちがPCで自ら学ぶ。教えることから自ら学ぶことへの転換、これが大きなポイントだと思う。
委員	子どもたちの課題として県が示しているが、基礎的な力や学ぶ力が足りない、折り合いをつけて話したり、人が困っているときに進んで助けようとしている子どもが全国と比べて少ないという結果もある。主体的で深い学びを掲げているが、自分が考えて選択して、行動する力が落ちている。教えるばかりで、どう思うか、思うことを話し合ったりする、子どもたちが自主的に学び、良いのか、悪いのか、判断して、選択して、共有して決定する。そういう力が身につくと自主的に学ぼうとする。 コロナで先生はとにかく教えることでいっぱい。コロナの中でどうしていたのか、どう思うのか、議論する時間が学校であったのか知りたい。コロナでどのように教えていたのか。先生方がどこまで学校の中で意識して臨んでいたのか。大変な状況にあるが、どう立ち向かっていくか、子どもたちも身につけることができる、ある意味チャンスでもある。
平尾道雄市長	学校の現場では、教育長の想いやそういう実践はどう伝わっているのか。
山本太一教育長	毎月校園長会で校長と面談して伝えており、例えば米原市の子どもたちには週１回以上100文字以上文章を書かかせるとか、具体的なことも指示をしている。教えから学びへの転換は、これから絶対必要と伝えている。校園長会で話して各学校に具体的な目標も含めて話してもらう。そういう場は有している。
平尾道雄市長	行政では、計画を作ると、計画に基づいて、実施できているかどうかチェックすることが進行管理になる。教育でいうと、教育振興基本計画を作るとどうなっていくのか。
山本太一教育長	教育委員会訪問時などのテーマに入れて伝えたりしている。授業の確保と定着をテーマとしたり、ICTの活用などテーマを決めて伝えている。
平尾道雄市長	第３期の計画の中では、教育委員会と現場がこれから作るもので動いてくれるものにしたい。無駄な会議はなくしたいし、結果や成果に結びつくアクションプランをつくり、具体的に動くものにしたい。
委員	アクションプランで具体的に誰がどう子どもに伝えるか、落とし込むのは管理職の力量が大きい。管理職がみんなにどう話してどう伝えられるか。ただ単に「読んでください。」ではだめ。落とし込みをどうするか。これはどんな組織でも同じ。
平尾道雄市長	そういうこともあるが、今日の議論を聞いていても先の展望が見える。現場しか見ていない人には、こういう計画も見てもらうことも必要。 時間の都合もあるので本日はここまでとしたいと思う。

会議の公開・非公開の別	■公 開　　傍聴者：　１人 □一部公開 □非 公 開 　一部公開または非公開とした理由 （　　）
会議録の開示・非開示の別	■開 示 □一部開示（根拠法令等：　　） □非 開 示（根拠法令等：　　）
全部記録の有無	会議の全部記録　■有　□無 録音テープ記録　■有　□無
担　当　課	政策推進部政策推進課（内線91-283）